「強制退去の顛末」『まほら』40号、2004年7月1日、44-45頁

強制退去の顛末

——稲賀繁美

八月の末の夜、イスラエルのベン・グリオン空港に降り立った。到着時刻は午前二時を回っていた。聖地はじっとりとした熱風が顔を撫で、空には西にやや傾いて黄色の満月がぼんやりと嵩を懸けて、濁った暗色の空に転がっていた。エジプト領事館で入国ヴィザを取得した翌朝、乗り込んだ長距離バスは進路を南に取り、起伏ある丘陵を乗り越えてゆく。兵役からの休暇だろうか、まだ幼げな少年兵が野戦服のまま座席に着くや、まもなく眠りこけ、その傍らでは最近ソ連から移ってきたらしい老夫婦が、キリル文字の新聞を読んでいた。ガザ・ストリップのイスラエル占領地を横目に走るうちに、やがて国境。快適な室内で迅速に出国手続きの進むイスラエル側に対して、エジプト側では、炎天下に点在するカウンターの間で右往左往を強いられる。一時間ほどして、ようやく出発。スエズ運河に達する。両岸の黄色の砂山の丘陵にはさまれて、突如真っ青な、狭い水路が開ける。通行船舶の隙を縫って、小型のフェリーで運河を横切る。ほどなくポート・サイード。午後遅くにカイロ駅前に到着した。

カイロに到着して数日たつと、突如レバノン危機が勃発した。前年に暗殺されたサダート大統領の後を襲ったムバーラク大統領は、ただちにイスラエルとの断交を予告したが、それはほどなく撤回された。一月ほどして、フランスへの帰国便が待つテル・アヴィヴ空港を目指し、再び国境を跨ぐことになった。当時カイロに存在した唯一の高層ビル、ナイル川の中洲に佇立するその最上階のレストランが安いヴァイキングを提供すると聞き、友人たちと最後の宴。若さに任せて暴飲暴食をしたのが、失敗だった。満腹状態で午前二時発の長距離バスに乗り、悪路を揺られるうちに、猛烈な不快感に襲われた。なんとか小康を取り戻した翌朝、再び国境通過。だが今度ばかりは状況が違う。行きは難航したエジプト側からはすんなり追い出されたが、イスラエル側で捕まった。フランス滞在中の日本人学生の一人旅。眼鏡を掛けた黄色人種の顔は、指名手配中の連合赤軍の面々の写真と、区別などつかない。岡本公三らのテル・アヴィヴ空港乱射事件がすぐにも想起される時代である。

まだ学生といった感じの女性係官が消えて、別室に移されるや、筋骨逞しい若者が担当する個室で、有無を言わせず全裸にされた。胎内からは、(残念ながら)何もアヤシゲなものは出現しなかったのだが、カイロで買った神秘主義の詩集が問題にされ、なぜかバッグに入っていたカーテン紐のプラスティック製の引き手が、爆弾かとの嫌疑を受ける。日本製蚊取り線香の、緑色のコイルの断片を見て、これは何だ、と殺気を孕んだ声で尋ねるから、火をつければ分かります、と実演しようとすると、大慌てで差し押さえられた。そこに物知りの上官が呼ばれ、アアこれは、といった調子で新米審査官を諭して、事なきを得る。

都合二時間ほど拘束された。この日本人persona non grataひとりのために、バスの出発は大幅に遅延。

だが、イスラエル国家の戦時下の諜報態勢の執拗さを悟らされたのは、この後だった。無事無罪放免かと思い、帰路の飛行機出発までの数日をイェルサレムに遊んだ。テル・アヴィヴとは比較にならない高品質のユースホステルに転がりこんでみると、朝食の席には、あきらかに元大学教授と見えるご老体たちが、早朝から政治談義を戦わせている。それを尻目に旧市街に出掛け、岩のモスクを訪れたり、石造りの回廊に覆われた市場を冷やかしたり、城壁の外部を散策していて、目付きの悪い失業中の少年に、ちゃちな盗みを働かれたり、遠乗りしたバスの終点で立ち往生してみたり、聖墳墓教会のほど近くで住民に招かれて、屋上から旧市街を見下ろしつつ雑談を交わす。そんな数日の後、ベン・グリオン空港を目指した。

イエルサレムの野良猫たち（筆者撮影）

土曜日が安息日のユダヤ社会たるイスラエルが、それでも社会機能を維持できるのは、そこに棲息する非ユダヤ人たちのお陰といってよい。空港へのタクシーも週末となれば、アラブ人たちが確保する。これが盲点だった。指定時間を一時間すぎてもタクシーが来ないため、そうとは知らず、予約したタクシーとは違う運転手の車に乗ってしまった。空港に着くと、客を逃した運転手が待っていて、違約だ、と文句を言う。貧乏学生の当方には、二重払いする積もりはない。いざこざは切り抜けたが、空港当局に通報されてしまった。該当者は二日前に国境で要注意人物としてファイルされている。またぞろ空港の特別室に連行され、所持品検査。あとは、厄介者を一刻も早く国境外に放逐する強制退去通路に乗せられてしまった。あらぬことに、ここらで暴飲暴食に起因する急性肝炎が本格的に発症。身体は苦痛に苛まれ始めた。加えて格安チャーター便は、予定より一二時間も遅延して、空港で一夜の後、搭乗開始は翌日の昼。

ようやく離陸した飛行機のお隣には、老年のユダヤ人夫婦。当方が日本人と分かると、やおら腕を捲って入れ墨を見せる。これはナチの収容所で入れられたものなのです。でも我々は知っています。リトアニアで日本人の外交官、スギハラという名前だったでしょうか、彼が我々の同胞を救って下さったことに、本当に感謝しています、と。連合赤軍の嫌疑を受けた自分と、善意による規律違反を犯した杉原千畝と。生命には別状のない当方としては、比べるのも憚られるが、少なくとも赤軍派がユダヤ人救出の功績でイスラエル国家から感謝されることはあるまい。厄介な中東状勢の、ほんの末端に、肌で接した。不幸なことに、パレスティナ問題は、その後二〇年を経て、ますます出口の見えない混迷を深めている。

いながぁ・しげみ●一九五七年、東京都生まれ。国際日本文化研究センター／総合研究大学院大学教授。文化交流史専攻。著書に『絵画の黄昏』『絵画の東方』編著に『異文化理解の倫理にむけて』など。